

こだわりとしての“ジェンダーとメディア”研究

諸橋泰樹 MOROHASHI Taiki

- 1 — 60年代半ばからの社会問題に接する
- 2 — 性という政治性におぼろげながら気づき始める
- 3 — 構造主義、文化人類学などモダンからポストモダンへ
- 4 — 米国型コミュニケーション観に対する批判の芽ばえ
- 5 — バブル経済時代と女性行政の進展時期
— 終わりに

今日のシンポジウムは、井上輝子さんがこの35年間で撒いた種の果実が象徴的に集約されたパネリストからなっていると思います。

女性学は、先程の井上さんの基調講演にもありましたように、米国のウィメンズリブから派生した日本版リブをオリジンとする、女性解放の実践としての側面と、女性という主体の側から、女性を対象とし、女性のために研究する学問としての側面の、両輪からなりたっています。学生運動をしていた阿部裕子さんはその実践をしている第一人者であり、井上さんの次代を担う若手の千田有紀さんは女性学研究者の第一人者であり、また司会をしてくださっている道場親信さんはリブなどを含む社会運動の若手研究者の第一人者です。井上さんが全国の大学に先駆けて和光大学で女性学を興して35年、実践、研究、運動が、しっかり実を結んでいるのだと言っているのではないのでしょうか。

この報告では、同時代体験としての60年代後半からのベトナム反戦運動や学生運動、公害反対運動、リブなど社会運動との出会い、そして構造主義など現代思想との出会い、そして女性学との出会いを経て、現在はカルチュラルスタディーズやポストコロニアリズムに興味を持つに至る個人的思想遍歴をお話ししながら、女性学・ジェンダー論の射程の広さを再確認してみたいと思います。

と言いますのも、人はいかにして「ものの見方・考え方」を身につけてゆくのか、人の



イデオロギー化と言いますか、政治的社会化と言いますか、大きく言えば社会意識がどのように形成されるのかについて、個人的にずっと興味を持ってきたからです。人は、必ずどこかの地域に産み込まれてその文化風土で生活し、家族など意味ある他者に育てられ、学校で教師や同輩集団から様ざまなことを学び、国家や消費社会のイデオロギー装置でもあるメディアから色いろな情報を得ながら、自分の観念や価値意識を形づくって行きます。人は社会を構築し、構築した社会によって人は構築されるわけですが、同じ社会に生きていながら、なぜ平気で女性差別をする人が育つのか。ファナティックなナショナリストになる人がいるのか。DVを振るう男性になったり核武装を主張する人になるのは、やはりそれは間違いだろう、みんな違ってみんないいといったレベルの話では済まされない、というこちらの観念、価値観があるわけです。イデオロギーの闘争の実践の場を我われは生きているのですね。

1 —— 60年代半ばからの社会問題に接する

1950年代後半の「もはや戦後ではない」と言われた時代に生まれたものの、育った東京の多摩地域には、立川、府中、横田、所沢、入間^{いるま}などに米軍基地や自衛隊の基地があり、家の近くにも外人ハウスがあり、アメリカンスクールがあり、まだ戦後の匂いがしていました。濃紺のアメリカンスクールのバス、キャデラックなど米国人の乗った車は、街中^{まちなか}でごく普通に見られる光景だったのです。近所の外人ハウスには、日本人の女性が住んでいるところもあり、また我が家の団地の子どもたちと外人ハウスの子どもたちとのちょっとした抗争があったりし、両親はかかわるんじゃないと言いましたが、その言い方にある種の禁忌を感じたものです。子どもとしては、もの珍しさというか怖いもの見たさというか、もっと色いろと知りたかったのですが。

小学校中学年の60年代半ばに物心ついた頃の時代は、「政治の季節」でもありました。特に印象が大きかったのは、小学校2年だった1964年の東京オリンピックでの表彰台での黒人選手の抗議のポーズ、67年に第1次訴訟がおこなわれた水俣病、そして68年の金嬉老事件などでした。これらにより、社会は人を差別する、差別された人は時には暴力に訴えてでも抗議する、ということを知りました。

また、65年に結成されたベトナムに平和を！ 市民連合、通称ベ平連は、作家や学者が加わった行動する知識人の団体として、子ども心にもカッコイイものでした。何せ、ベトナム戦争反対の声を大がかりにまとめ上げ、メディアでも大きく扱われ、ベトナム戦争に従軍する米国兵が脱走してきたのを海外へ逃がしたりしたのですから。60年安保のあと、高度経済成長期のこの国は、所得倍増だバカンスだ、オリンピックだ新幹線だと浮かれています。日米安保条約に縛られた日本は在日米軍基地を通じてベトナム戦争に荷担していると批判し、当時言われていた「昭和元祿」に冷や水を浴びせる彼らの議論は、よくわからないながらも「おとなの議論だなあ」と思ったものです。小田実の早口で喧嘩腰の喋

り方、週刊朝日の特派員としてベトナム戦争を体験した開高健の甲高い関西弁も印象的でした。

小学校高学年の60年代後半は、連日のように学生運動のことが新聞・テレビ・週刊誌などのメディアで報道されていました。彼ら・彼女らは、大学の学費値上げや管理・処分などに反対し、ベトナム戦争をおこなっている米国と安全保障条約を結んで日本の基地を提供している佐藤栄作政権に反対していました。住んでいたのは三多摩でしたので、都内の大学や街頭での、集会現場や機動隊とのゲバルトシーンは直接に眼にしたことはありませんでしたが、親と一緒に都内に出た時など、辻辻で機動隊が待機していたり、学生たちがおらびあげていたり、都会は怖いなあ、まるで戦争状態だなあと感じました。ヘルメットをかぶってタオルでマスクをした学生たちの傍若無人で過激な言動も、怒りのエネルギーが過剰で怖かったです。それ以上に統一の濃紺のヘルメットと戦闘服に身を包みジュラルミンの盾を持って棍棒をぶら下げた機動隊という暴力装置に、当時そういうことばはもちろん浮かぶべくもありませんが、過剰防備というか明らかに対称性を失っているというふう思ったことは確かです。もう当時から「心情三派」だったのでしょう。

また不思議なことに、プラモデルでゼロ戦など兵器ものは作り、少年マンガ誌で当時流行の戦争ものをよく読んだくせに、自衛隊は嫌いでした。親によると、ことばが喋れるようになった頃から、「じえいたい」の意味がわからずに「じへいたい」と言っていたようですから、子ども心にも「自衛のための」ではなく、やはり国家の暴力装置である「兵隊」であることを感じ取っていたのでしょう。原爆に関するメディア映像もよく観ましたが、戦争に反対の感情は幼少期からあったように思います。

家にはドストエフスキーはじめ河出書房の世界文学全集、夏目漱石はじめ筑摩書房の日本文学全集がありましたので、小学校高学年になってからはわからないながらも『カラマーゾフの兄弟』を1文字1文字追うように読み、『坊っちゃん』のべらんめえ調の文体に笑い転げたりしました。『罪と罰』は手塚治虫のマンガで知ったのですが、自宅の全集には収録されていなかったので、新潮文庫で買って読みました。

当時の若者のオピニオンリーダーは、作家の大江健三郎と開高健、高橋和巳であり、井上光晴であり、先の小田実であり、またそれより年長者の、『近代文学』や『新日本文学』系の野間宏たちでした。学者・評論家としては、日高六郎のほか、鶴見俊輔、高島通敏など『思想の科学』に集う人たちでした。こういった知識人たちの名や発言・文章が、新聞・雑誌などを通じて小学生の耳目にも入ってきていました。新聞の夕刊文化欄、新聞2面下段の『文芸』とか『群像』とかの文芸雑誌の広告、『現代の理論』『状況』『現代の眼』など総合誌の広告、そして『朝日ジャーナル』の広告などで、彼らの名前を眼にしないう日はなかったからです。

自身の政治的社会的な多様な要因

我が家は、普通の会社員の父と家事専従の母からなる1人っ子世帯でした。特に父親は

インテリを気取って進歩的なポーズを取ってはいましたが、学歴という象徴資本が基準となるような人でした。差別に関しても、厳しく戒められはしましたが、その実、学歴差別、人種差別、階級差別、障害者差別などのメンタリティを、先の外人ハウスに対するタブーもうそうでしたが、抱えている人だったと思います。それは当時の学生運動に対しても同様で、親の脛をかじって大学に通わせてもらっているのにと、大学にいながら大学を否定するのは自己矛盾だといったような、国立大学出の法学士であることを自慢する割にはきわめて世俗的な思考・思想の持ち主だったと思っています。

そのため、小学校高学年から、私立や国立大学附属の中学受験を意識するようになっていました。もっとも、三多摩の田舎ですし進学塾のようなものもありませんので、大学生の家庭教師がついて算数を中心に勉強させられ、あとは父親が書き取りや理科、社会、算数などを見る程度のものでした。模擬試験も受けたことはありません。

でも、1人っ子にとっての家庭教師の大学生は、兄貴代わりでもあり、有難い存在でした。早熟な小学生と一緒に麻雀をしてくれ、酒を吞んでくれ、そしてラジオ制作や鉄道模型を教えてくれ、大江や開高、小田実、また安部公房の存在を教えてくれ、北杜夫の「どくとるマンボウ」ものを教えてくれ、フォークソングを教えてくださいました。『どくとるマンボウ航海記』には吹き出し、出たばかりの『どくとるマンボウ青春記』の影響で、旧制高校生の隠語を喋って気取ったりしました。そういった作家のエッセイなどの影響で、学校での作文では、6年生から一人称に「私」を使うようになりました。おとなぶって、自我肥大が始まっていたのです。

これでは、ますます中学受験に成功するわけがありません。しかし、自分は国立理工系の大学へ行って科学者になるのだ、もし文系だったら新聞記者か作家になるのだ、そうやって、今の学生運動のようなスタイルでない、穏健な、大江・日高みたいな知識人・言論人としてカッコよく活躍するのだと、勝手に決めていました。

1969年1月19日、2校の中学受験が迫った中、週1回の家庭教師では間に合わず、父親が朝から晩まで息子の受験勉強の面倒をみている時に、終日東大本郷の安田講堂における、立てこもり学生たちと機動隊との攻防戦がテレビ中継されていました。当初学生からの投石や火炎瓶によって手こずっていた機動隊も、徐々に講堂内に入り込むのを固唾を吞んで見守りながら、どうかこの“城”がもってほしいと強く願ったことを憶えています。それは、学生たちの自治の、反逆の、自由の、象徴空間であることがよくわかりましたから。砦の上の彼ら——彼女らはいなかったかもしれませんが——の世界がここで潰えてしまうことで、若者たちが世界を動かすことがついぞかなわなくなってしまうことを恐れたのです。そして、それはその通りになりました。

よく、女性学をやっていて、色いろな人から、なぜ女性差別やその解消に興味を持ったのかと質問されます。人はいかに社会意識を身につけ、政治的社会化やイデオロギー化されるのか、またジェンダー化されるのか、地域、家族、学校、メディアといった外部環境との相互作用のありようを追究したいと思って学者になった者としては、よくわかる問い

です。しかし、確たるきっかけもない、難しい問いです。強いてあげればおそらく、自身、差別問題や社会問題に多少センシティブであったことが第1点、2つめに両親の表面上はリベラルな思想的影響、3つめにそれとは反対に両親の言説に垣間見える世俗性や子どもに対する抑圧への反撥心、4つめにメディアのみならず社会的な雰囲気をもたらした同時代体験による社会性への目覚め、5つめにマンガ雑誌から小説に至るまでの読書経験による社会性への目覚め、6つめとして、次に述べる大学生の家庭教師の存在と学生、つまりおとなへの憧れ、彼らがおとらししてくれた社会性への目覚め、といった要因があるだろうと思います。今は、「おとな」が憧れとはならなくなっていました。

社会にプロテストする若者への憧れ

当時のオピニオンリーダーは、大江、開高といった作家たちや、日高、鶴見といった学者たちだと言いましたが、小学校5・6年生にとってはもっと身近で年若い、大学生のオピニオンリーダーがいました。それは、家庭教師が教えてくれた、「帰ってきたヨッパライ」というアングラソングで小学校5年生の68年の時に一世を風靡していた、ザ・フォーククルセダーズです。フォークルは、「ヨッパライ」のあとシングル盤の「イムジン河」を出そうとして発売中止になったことで、小学生の間でも話題になっていました。彼らのレギュラー番組で1回か2回聴いたことがあり、すぐにメロディーは憶えていました。この曲が朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の曲であり、南北分断を歌った唄に対してレコード会社が政治的配慮により発売自粛をした経緯や背景までは小学生には理解が難しかったのですが、「反戦歌が発売中止になった」という不当性はよく理解していました。その代わりに出た「悲しくてやりきれない」という唄も、大好きな曲でした。

そんなフォークルが、たった1年のプロ活動でメディアから去り、解散してしまうということも知っていましたが、家庭教師はそれを「カッコイイ」と表現してえらく評価し、彼らのアルバムに入っている「何のために」という反戦歌を教えてくださいました。すっかり感化され、自分は中学に進学したらフォークバンドを結成するんだ、と決意し、すぐに解散記念として出たばかりのシングル盤「青年は荒野をめざす」や、「何のために」が入っているコンパクト盤を買ってもらったりしました。医師となつてのちに九州大の先生となり、先頃定年になった北山修、昨年自死してしまった加藤和彦、そして妻の介護と専業主夫をやって本を出し、現在は身体の調子が悪いらしいはしだのりひこ、この3人はいずれもユーモアとウィットを備えた発言や文章で、小学生をも魅了したものです。

さらに、孤独に憧れ実際に孤独だった小学校高学年生をとらえたのが、ラジオの深夜放送でした。パーソナリティーであるDJの語りや受験生の投書などに耳をすませていると、自分がいっばしの「青年」になったような気がし、「もうひとつの別の広場」を共有しているような気がしました。受験生のリクエストカードや投書は、高校生による大学受験に関するものでしたが、こちらは小学生の中学受験生。ちょっとした優越感もあったかもしれませんが、したがって、深夜放送の論調である「受験戦争」は否定すべきもの、というカッ

コいいイデオロギーと、親の言うなりに受験するとはいえエリート志向のある自己のジレンマを止揚する心理的作業をしなければなりませんでした。それは結局、小説を読んだり、フォークソングを聴いたり、夜中遅くまで深夜放送を聴いたり、いわゆる受験勉強に対するサボタージュという形であらわれたように思います。

心残りなのは、新宿西口フォーク広場をこの眼で見られなかったことです。多摩地区に住む小学6年生にとっては、シンナーでラリっているフーテンも多かった新宿というのは、大都会であり、怖い場所でしたし。

青春ものの小説と洋楽にふれることで拓がる世界

さて、そんなことをしていましたから当然のことながら私立中学も国立大附属中学も受かる筈もなく、小学校卒業と同時に引っ越しをし、場所は同じく三多摩地区ですが、現在居住するところの市立中学校へ入学します。69年4月のことです。音楽雑誌で呼びかけて反戦フォークを歌うフォークバンドをつくったり、中学の部活でフォークソングクラブをつくったり、手書きコピー印刷やガリ版刷りの政治的な新聞やビラをつくったり、そこで「友よ」の作詞作曲で知られる岡林信康や「受験生ブルース」のヒットで知られた高石友也の発言をなぞったり、生徒会役員に立候補して北山修の「戦無世代は何をするかわからない存在であっていい」という文章を剽窃して立会演説会で叫んだりしていました。赤軍派が「よど号」を乗っ取り、朝鮮民主主義人民共和国に亡命するのは、年が明けた70年のことです。テレビ中継にかじりついていました。

おませな中学生の愛読書は、中学になっても来てくれた何代目かの家庭教師の影響で、岩波新書となりました。また小田の分厚い平和論や運動に関するエッセイ集のほか、大江の『厳粛な綱渡り』、高橋の『孤立無援の思想』など重厚なエッセイ集も、写経のように書き写したりしました。また「青年」というタイトルがついている小説が好きだったので、大江の『孤独な青年の休暇』『青年の汚名』『遅れてきた青年』、あるいは『個人的な体験』『性的人間』、学生運動を素材とした柴田翔の『されどわれらが日々——』なども愛読書でした。安部公房『けものたちは故郷をめざす』も一種の「青年もの」として読めました。もっとも、中学1・2年生にこれらのエッセイ集や小説がわかっていたとは思えません。マンボウもののほか、恋愛ものだったら「ある愛の詩」として映画になったエリック・シーガルの『ラブ・ストーリィ』、青年ものだったら五木寛之の『青年は荒野をめざす』や石川達三の『青春の蹉跎』、石原慎太郎『青年の樹』の方が、中学生には面白かったというのが本音のところでは。

70年の中学2年になって読んだ、前年の芥川賞受賞作品の庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』と、その続編『さよなら怪傑黒頭巾』は、主人公の饒舌なモノログで進行する、およそそれまでの小説とはかけ離れた作品でした。しかしながら、安田講堂闘争によって東大入試が中止になった主人公が、大学へは行かずに自分で勉強しながら社会をよくするためにどうしたらよいか、自分探しをする小説であり、山の手的主人公たちの都会的で

インテリジェンス溢れる会話や議論にはちょっと憧れたものです。また、そのネタ本とされた、サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』は、中学生にとっては画期的な本、文体でした。

日本のカレッジフォークソングから、本家のアメリカのフォークソング、そして洋楽へと興味が向き始めたのも、中学時代です。遅ればせながらPPM、ブラザースフォー、キングストントリオ、またジョン・バエズやジュディ・コリンズといったモダン・フォークのプロテスト・ソングに目覚めたのを皮切りに、ビートルズとサイモン&ガーファンクルが、我われにとってのカリスマでした。こういったグループやアーティストたちは、メロディアスな音楽や前衛的なロックのリズムで刺激的なだけでなく、歌詞も社会性があり哲学的でしたし、音楽に関する主張のみならず政治的発言、思想、生き方など全てがカッコよく、役割モデルとなりました。

中1から中3にかけて深夜放送を中心に洋楽に明け暮れたのと同様に、中学時代は洋画にも挑戦しないわけにはいきません。ですが、サイモン&ガーファンクルの音楽がフィーチャーされたマイク・ニコルズ監督の「卒業」は、ややおとな向け過ぎたのでしょうか、当時はあまりピンと来ませんでした。それよりもアラン・パーカーが原作・脚本を書き、ビー・ジョーズやクロスビー・スティルス・ナッシュ&ヤングの曲を使った「小さな恋のメロディ」の方が我われにははるかにわかりやすいものでした。ビートルズのドキュメンタリー「Let it be」でのオノ・ヨーコは、その容貌があまりに欧米人がステレオタイプ化する「日本的」な感じがして、中学生には好評ではありませんでした。ステッペン・ウルフなどのロックが溢れるデニス・ホッパー監督による「イージー・ライダー」のピーター・フォンダはカッコよく、差別に立ち向かってゆくラストシーンは衝撃的でした。

海外翻訳ものを読むことがカッコいい

洋楽や洋画への目覚めとともに、小学校高学年に接したドストエフスキーやトーマス・マン以外の翻訳書にも眼が向き始めます。サルトルの『嘔吐』はどこが面白いのかわからなかったものの、カミュの『異邦人』は、主人公の行動の不道徳的ところが「不条理」っぽく、カフカの『変身』は主人公の運命が「不条理」っぽく、小説らしい小説でした。そういった翻訳に足を突っ込みだすと、海外の思想書に対するコミットメントが始まりました。わけもわからずサルトル『実存主義とは何か』、ライヒ『性と文化の革命』、マルクーゼ『エロスの文明』といったエッチらしい本を買って小脇にかかえ、ジェームズ・クネン『いちご白書』、チャールズ・ライク『緑色革命』、またそれに『毛沢東語録』といった革命的な本がバイブルになってゆきました。我われにとっての「デカンショ」です。

学生運動はこの時期になると急速に後退していました。実際のところ、代々木系と反代々木系の区別、民青と全共闘の確執など、よくわからないところがありましたが、亜紀書房の『砦の上におわれらの世界を』といった東大全共闘の記録や、三一新書『全学連』などの解説本を読みました。中学生にとってはこれらの本はかなりの出費です。LPレコー

ドが1枚2000円もして、減多に買えるものではありませんでしたから、これらを買うには一大決心がいったのです。

ともあれ、社会の差別や矛盾を解消し変革するためには、理論と実践が必要であり、そのためにはどうしてもサルトルの前段階である、マルクスやエンゲルスを勉強しないわけにはいけないらしいということで、幸いにしてお金のかからない岩波文庫で星の数が少ない、中学生にも買える『共産党宣言』『空想から科学へ』を、意味はサッパリわからないながらも読んだりもしました。

あの時代、同時代の空気を、街頭や、テレビ、新聞などメディアによって触れた体験、小学校高学年から中学生時代に来てくれた大学生の家庭教師という意味ある他者との出会い、メディアで活躍するオピニオンリーダーたちの存在、そして小学校高学年から中学、高校にかけての読書経験、また音楽経験、映画体験などが、自我形成や社会意識の形成に多大な影響を与えていることは間違いありません。現在の若い人たちは、あの頃のように「背伸び」して、社会の事象を理解しようとし、難解な本や音楽をむさぼるように読み・聴くことがなされているかということ、そうではないように思えてなりません。現代において若い人たちが必ず通過する「デカンショ」は成立し得ないのかもしれない。

70年アンボはそれなりに盛り上がりましたが、阻止することができずに自動延長され、中学2年生の身分では新聞紙面を大きく飾ったベ平連のフランスデモに参加することもできません。1学年上の年代にあたる保坂展人は、デモに参加したり学校でデモをしたりしたようですが。一方で大阪万博があり、世間は「人類の進歩と調和」に沸き立ち、前年7月に着陸したアポロ11号が持ち帰った「月の石」を見るために、「辛抱と長蛇」の列が続いていました。秋には三島由紀夫が市ヶ谷の自衛隊で割腹自殺をし、学校から帰ってきて玄関で母からその話を聞いた時に、思わず「カッコイイ」と叫んだりしました。つまり、彼の右翼的パフォーマンスは本物だったのだ、言行一致ではないか、と思ったのです。にもかかわらず、三島が絶望したように、時代は急速に冷めてきているようでした。

こういった、時代精神にセンシティブだったことや、事件・事故をよく記憶していること、カウンターカルチャーに接し、ベストセラーや世相についても敏感なセンスを持っていたらしいことが、やがて専攻のひとつとなるマスコミ研究やポピュラーカルチャーの研究、若者文化論、社会意識論などに役立っていくことになります。またその後、井上さんが『思想の科学』で編纂した「戦後女性史」をさらに詳細にしたものを大学院生時代に井上さんと『ジュリスト臨時増刊』で編纂したり、有斐閣から刊行され改版を重ねている井上さんと江原由美子さん編『女性のデータブック』後半の「戦後女性史年表」などに、社会的「できごと」へのこだわりが活かされていると思います。

内ゲバと終末論の時代に「決意」する

この71年には、いよいよ社会は暗い様相を帯びていったようにみえました。これは、中学3年の高校受験期であるということと、思ったより息子の学力が伸びず“見込み”がな

いために父親の機嫌が悪くなり、やがては父母が離婚するなど、個人的な事情も左右していたからだと思います。この年の前半には高橋和巳が京大闘争で疲弊し『我が解体』を刊行して病死し、米国のニクソン大統領が訪中を日本の頭越しに決め、岩手県雫石上空で自衛隊機と民間旅客機が空中衝突し、ドルショックで円が変動相場制に移行し、後半には北山修のエッセイ集『戦争を知らない子供たち』や、学生運動と失恋によって傷つき自死した高野悦子の日記『二十歳の原点』がよく売れていました。

高野悦子の本で死の数日前に書いたとされる最後のページの詩は、「白」が強烈にイメージされ、哀れを誘いました。深夜放送、たとえば加藤諦三の「セイ！ヤング」では彼女の「弱さ」が議論されており、同意したものです。学生運動にコミットし、夭折した若者たちの手記としては、東大新聞研究所の学生でもあった、膠原病で亡くなる所美都子の『わが愛と叛逆』、敵対セクトの恋人に対する失恋で自死する奥浩平の『青春の墓標』、そして60年安保の国会前デモで死亡させられた樺美智子の『人知れず微笑まん』などがあり、中3から高校時代にかけてのバイブルになりました。

そして明けて72年、志望校には到底合格し得ない失意の高校受験のただ中は、「あさま山荘」事件のテレビ中継の真っ最中でした。あれよあれよという間に若者たちは先鋭化し、世間からの離反を招き、内ゲバを繰り返して、自滅してゆきました。鉄球が打ち込まれる雪のあさま山荘の生中継は、東大の安田講堂が陥落する時の映像と同じく、個人的記憶に深く刻まれることになります。

3月、学区でナンバースリーのレベルの都立高校に進むことになった日、父母の離婚が決まり、父親は出奔ともいえるような仕方であつて母と残されました。これからは自分が、何もできない母を支えてゆかないといけない、と言いつけさせました。その母は現在、病院で床に臥せっており、いよいよ「おひとりさま」による看護・介護が始まっています。

ところで、学生運動に「遅れてきた青年」である我われ高校生は、世間から三無主義、四無主義と言われ、シラケの世代というレッテルを貼られていました。それはかなり当たっていたと思います。何しろ、我われの口癖は「かったるい」でしたから。既に高校では制服はなくなって自由化されており、新聞会は壊滅状態、社会科学研究会もなくなっていました。アパシーの蔓延によって「ノンポリ」ということば自体が死語となり、井上陽水は「傘がない」で、自殺する若者の増加や我が国の将来よりも、今、君の家に行くための傘がないことが問題なんだと歌っていました。一方「ツッパリ」ということばが人口に膾炙して、“熱いやつら”はリーゼント頭になり日の丸の鉢巻きをして暴走族として自己顕示していました。

72年の高1のときに沖縄返還がなされ、佐藤栄作の「これで私の戦後が終わった」という科白を白じらしく聞きました。高校生にすら、沖縄が日本に「返還」されるにしても基地つきであり、もしかしたら核兵器もあるかもしれないというのは常識でしたから。しかしながら、高校では沖縄をめぐるクラス討論のようなものは、気配もありませんでした。

こちらにもバンド活動の方が忙しかったということもあります。またこの年は、沖縄返還の日米間の密約の暴露をめぐって毎日新聞の記者と外務省の女性の事務官が逮捕されるのですが、記者が事務官と関係を持ち、文書の持ち出しをそそのかした問題にわい小化されてしまったことに、我ながら悲憤慷慨したことを憶えています。

高校2年の73年にはオイルショックが起こり、トイレットペーパー騒動が発生して、『ノストラダムスの大予言』や小松左京の『日本沈没』がベストセラーとなり、世の中は「終末論」ブームの様相を呈します。当時、黙示録にとらわれていた大江健三郎の小説『洪水はわが魂に及び』は、大変に迫力ある筆致で、核兵器による人類の終末を憂う高校生の読者を魅了しました。大江はノーベル賞を獲る、とその頃から予言していたものです。はからずも、高2のときの国語の先生は、高橋和巳のファンで、話がよく合いました。

この頃から、小学校高学年から何となく敏感に培ってきた「社会性」というものが、それほど「背伸び」でもなく、自分の生き方、思想、将来の問題として無理なく接続するようになってきたように思います。自身がこの社会で何をなすべきか、どのような知識を身につけて扱うべきか、その力をどのように使うべきか、見えてきたわけです。いや、「銜い」はまだまだありましたけれども、肥大化していた自我が、少しは等身大化でき自分の中に収めることができるようになってきたのでしょうか。高2の夏休みに突如、自分は、社会改良して平和や人のために生きるのだと決意しました。

人類は滅ぶかもしれない、しかし抵抗しながら滅びようではないか、と書いた大江や大江の指導教員だったユマニスト渡辺一夫に導かれるようにして読んだ聖書の黙示録のメタファーは、環境破壊、食糧不足、地震などの大災害、原子力発電の危険性、核戦争のおそれなどによって、現実性を帯びているようにみえました。科学者かジャーナリストか、メディアで活躍する社会運動家か、「赤頭巾ちゃん」を助ける「生涯にわたる阿修羅として」「持続する志」をもった「ライ麦畑のつかまえ人」になろう——。考えてみると、小学校の頃にうそぶいていたことを、まだうそぶいていたわけです。

2——性という政治性におぼろげながら気づき始める

読書の勢いはさらにつくことになり、安部公房や野間宏だけでなく、埴谷雄高、堀田善衛、倉橋由美子などの小説を全て読む誓いを立てたりしました。大江の全集は既にありましたが、それに続いて高橋和巳の全集や小田の全集、新潮社で出始めていたル・クレジオなどの仏文学、ノーマン・メイラーやジョン・アップダイク、集英社で出始めていたフィリップ・ロス、アラン・シリトーなどの英米文学にも拮据ります。心理学、社会学、政治学、哲学、平和論などの専門書を片端から購入し、線を引きながら読みました。遅ればせながら、本当のデカルト、カント、ショーペンハウエル、そしてプラトンやソクラテスにもふれることになります。どうも理数系が思ったより得意でないことに気づき、理工学部志望から文科系、たとえば社会学や政治学、心理学などの人間科学か、情報科学、あるいは

は人間を描く文学が、やはり自分には向いていると固まってゆく時期でした。

雑誌は、『朝日ジャーナル』のほか、『現代の理論』『情況』『現代の眼』『展望』などの理論誌が新左翼思想や市民運動を語っており、そのうちのいくばくかは高校生にもわかるものでした。中でも「総会屋系雑誌」といわれた『現代の眼』は竹中労のルポなどもあり面白かったです。『群像』『文芸』など文芸雑誌も読みました。ほかに筑摩書房からは小田・高橋・開高・柴田翔・真継伸彦が編集同人となった『人間として』が出ていて比較的読みやすく、今でも憶えている論文やフレーズがあります。ベ平連は74年に解散するのですが、その前後から小田実や小中陽太郎が出る集会や、大江が出る岩波の講演会などにもせっせと出かけました。この頃の集会や講座は、今みたいなネット社会と違いますので、チラシや口コミで知るしかありません。手書きの「通信」というミニコミをたよりに、公害原論の宇井純さん、大学解体論の生越忠さんの東大自主講座や出前講座にも参加したものです。

フロイトを文庫本で読み出すのもこの時期です。「性」という名のつくに本として、ケイト・ミレット『性の政治学』という函入りのとんでもなく高価な本が自由国民社から出ていましたが、とても手が出せませんでした。ヴァンス・パッカー『性の荒野』という本は、セクストクターとして有名な奈良林祥とタレント教授だった石川弘義の翻訳でしたが、これと、新潮文庫で分冊で出ていたポーヴォワール『第二の性』は、購入し、ドキドキしながら読みました。中学時代にわけもわからず買ったライヒやマルクーゼよりははるかにわかりやすく、「望むこと」が書いてあったからです。

当時から、社会構築主義的な立場から性差をとらえていたわけではもちろんありません。フロイトもフロイト左派も、またメイラーやヘンリー・ミラー、大江など「性の作家」たちは、吉行淳之介や作風は全然違うものの野坂昭如といった「性の文学」が女性を本質主義的にとらえているのはまた異なりますが、やはり本質主義的な視点で女性ないし男性のジェンダーとセクシュアリティをごっちゃにしてとらえていたと思います。ただ、セクシュアルアイデンティティやセクシュアルオリエンテーションに関して彼らはかなり方法論的でした。フェミニズム的な批判は数多くありますが、吉行や野坂、あるいはメイラーや大江などの文学作品は、前者は女性の性の能動性を、後者は性の政治性を、おのおの焦点化したということで、優れた作品だと今でも思えるところがあります。この場合の性は、ジェンダーではなくセクシュアリティですが。

ともあれ、当時ジェンダーとセックス、セクシュアリティの言語的区分——しょせん言語的カテゴリーですのでそれ自体ジェンダーという言語的命名行為の手の平の上の作業に過ぎないわけですが——それらの操作的概念を知る由もありません。性がどのように語られようと、それは男性の作家や哲学者の視座でしかなかったということは、今ならわかるような気がします。女性の主体やセクシュアリティが文学で描かれるのは、富岡多恵子や中沢けいなどの登場を待たねばなりませんでした。

高校時代は、ウーマンリブとの出会いもありました。新聞で揶揄的に取り上げられた記事をみる限り、ベ平連を見ていた者としては失礼ながら垢抜けない運動、ヒステリックな

運動に見えましたが、72年にできた中ピ連（中絶禁止法に反対しピル解禁を要求する女性解放連合）には痛快さがあって、好きでした。メディアを使つてのスクンダラスかつ男性糾弾的な運動は、むしろ計算され尽くしたもので、またリーダーである榎美沙子さんの主張も逆説的ながらクリアなものでした。ああいう、したたかかつ論理的な運動こそ、理想に思えたのです。あの時期、中ピ連を支持した高校生、ましてや男性など、皆無だったかもしれません。

大学へ行くべきか、行かざるべきか

読書とともに、映画はロマン・ポランスキーやスタンリー・キューブリック、また遅ればせながらアメリカン・ニューシネマなどに目覚め、またロック喫茶に入りびたりしました。どこの高校の部室からもディープ・パープルのコピーが聞こえてきた時代です。本、音楽、映画にハマれば、当然「創作」に向かわないわけには行きません。中学時代から作詞・作曲はしていましたが、高校に入るとオリジナル曲を量産して自分のバンドで歌い、人に曲を提供し、コンテストなどに応募し、テレビに出るなどして、やがて高3になると小説を書き始めました。

高校3年は、大学受験と社会性とのほざまで、またも煩悶することになります。どうも、中学受験、高校受験とやってきて、いっかな「受験」ということから逃れられない自分を自覚せざるを得ません。しかも自分が思うほど頭がよくなく、「やればできる」と思っているでも「やってもできない」ことがわかってくるにつれて、そのことを認めなければいけないのは辛いものがありました。エリート高校の友人たちに誘われて入った、喫茶店で駄乗りながら社会問題を話し合うサークルでも、大学受験と受験勉強をめぐって、みんな自己の内なるエリート志向とそんな自己の否定とで引き裂かれ、またメンバー同士も引き裂かれました。

その中の1人は、受験勉強も受験も拒否して和光大学に進学し、あとのメンバーは第1志望の北大、慈恵医大に進んだ者はいたものの、絶対入ると豪語していた京大や東北大には軒並み落ちました。和光に進んだ男はなぜか民青のアグレッシブなメンバーになり、8年以上いたのでしょうか、のちに抹籍されたのではないかと思います。もう1人、附属から慶應大に進んだ女性は、当時からフェミニズムの考え方をめぐって話が合う人でしたが、その後紆余曲折を経て、数年前に和光の大学院へ入学、井上さんの導きで日本女性学会で再会することになります。

大学受験が迫っている秋でも、進学する学部の専攻を知るためにウェーバーの理解社会学に関する岩波文庫を読み、心理学者の南博や宮木音弥の岩波新書を読み、岩波から出ているキャントリルの平和心理学を読み、こりゃ大学は受からんな、大学院なら受かるかもしらんが、と思いつながら受験勉強から逃避する日々が続きました。

事実、75年3月に高校を卒業するのですが、志望大学は1つも受かることはありません。その後長期のアンダーな生活が4年間続くこととなり、自分は何者でもないということ

否応なく突きつけられることになります。

もっとも、高校を出てからのしばらくは、ちょっと世を拗ね、呪って引きこもり気味ではあったものの、それを心配してか誘い出してくれる友人もまた多く、評論のミニコミを出したり、小説の同人誌を出したり、そこでものした文章は内輪ではなかなか好評でした。高校の同級生が進学した短大のフォークソング・クラブの顧問みたいなこともやっていました。こういった才能でやってゆけるのではないかと思ったほどです。また、学生運動や市民運動の端っこにかかわったりもしました。たとえば韓国で死刑判決を受けた詩人・金芝河の釈放を求める知識人たちのハンストを遠巻きにしたり、新しくできた革新党派の選挙応援をしたり、三里塚空港反対の援農に行ったり、市民集会を開いたり、遅い「政治の季節」でもありました。こっちの方でも頭角をあらわして、やってゆけるのではないかとも思いました。ミニコミ、学生運動仲間の女性の友人たちは新宿のジョキに出入りし、私たちの雇用平等法をつくる会や行動を起こす女たちの会などとかかわり、のちの80年のことになりますが、女子の学生たちの就職差別に抗議するハンストをおこなったりもします。

しかしながら母子家庭を生きるには何かしら「たつき」の手段を得ねばなりません。市民運動や書きものからは次第に遠ざかり、同期の連中は海にスキーにと学生生活を謳歌する中、地元の量販店でフルタイムで働きながら、庄司薫の主人公のように大学に行くことをしないで「力をたくわえる」日々が始まりました。20歳にして人生の幕引きをし、ひっそりと暮らすことが自分にはふさわしいとでもいうように。

3—— 構造主義、文化人類学などモダンからポストモダンへ

それから数年経った1979年、現役で進学した中・高の同級生たちが大学を卒業した4月、鶴川のキャンパスにいました。大学へ行かないことへのこだわりから4年かかって解放され、素直な気持ちで大学と向き合うことができるようになり、自分がたくわえた力を試したいと思うようになっていたのです。誰も自分のことを知らないところで1からリセットし、心底伸び伸びした気分でした。22歳と11カ月のことです。

日本で最も面白い授業をしている大学は、駒場にある東京大学の教養学部と和光大学人文学部人間関係学科だという定評がどこからともなくあり、もとより受かるのは後者しかありません。しかも学力試験で正面突破するのもあやしいものがあったので、前年秋、親には受験することを内緒で職場の上司から受験料を借り、恥をしのんで出身高校に推薦状を書いてもらいに行つて、推薦制入試を受けました。そこでの小論文試験は会心のできでしたが、体育の先生かと確信するド短髪の先生と、ゴリラのような相貌の出ッ歯の先生との面接では、キミは小説も書くのかね、なぜ文学科じゃないのか、と言われて、多少ムツとして「人間科学」への熱い想いを語り、何とか入学を許可されました。出ッ歯の先生は、ちょうど伊丹十三との対談による朝日出版社のレクチャーシリーズ『哺育器の中の大人

『精神分析講義』の口絵写真で見ていた岸田秀さんと、面接のときに、わぁ本人だと思いました。もう1人の学内でトレパン姿でいるのが似合いそうな「体育の先生」は、これも持っていた新泉社の『差別論ノート』の著者である三橋修さんであることを、入学後に知りました。

当時の和光大学は、学長の梅根悟さんを筆頭に、専任に安永寿延さん、先に名の出た生越忠さん、針生一郎さんなどスター教授がキラ星のごとくいました。非常勤講師には、宇井純さん、粉川哲夫さん、西江雅之さん、千野栄一さん、山下恒男さんらこれまた有名人が教えにきていました。「力をたくわえている」間中、大江や山口昌男、中村雄二郎らの本に導かれるようにして、構造主義、文化人類学、チェコ構造美学、そして現象学などに拮がっていましたので、あらゆる授業が全て自分が勉強してきたものと結びつき、収斂してゆく知的興奮を味わえました。自慢めきますが、書いたレポートが評価されないはずはありません。それらが縁で、非常勤でいらしていた当時はFCT子どものテレビの会主宰、のちの市民のメディアフォーラムの、亡くなってしまった鈴木みどりさんには発表媒体を世話してもらったり、非常勤の小沢牧子さんには大学院生時代に社会教育講座の講師を紹介してもらったり、篠原睦治さんには修士論文を当時の日本臨床心理学会の学会誌にその一部を発表させてもらう機会を得たりしました。

「人間科学」を自分なりに構築するにあたって、外国語科目も含めてカリキュラムのいくつかの柱を立てました。1つの柱は心理学、もう1つの柱を社会学に置き、コミュニケーション、政治といった権力関係をひもとく「知」を配置し、障害者差別、女性差別、民族差別、公害、科学といった権力関係から派生する暴力を各論に置く、といったような構造だったと思います。

プロゼミは、井上輝子さんのところを選びました。79年度のテーマは、民間で出ている『婦人白書』と政府の『婦人の現状と施策』を読み比べる、というもので、それに興味をもったからでした。大学に来るまでの4年間で、もろさわようこ、高群逸枝から、森崎和江、山崎朋子、リブ合宿の模様が再録され池上千寿子の論文が載っている重紀書房の『性差別への告発』や高校時代に買えなかったケイト・ミレットまでとりあえず読んでいましたので、女性差別の本源をさぐりたいと考えたからです。

井上さんは、先に挙げた所美都子のいた東大新聞研究所の出身であり、『わが愛と叛逆』にも、メディア史で有名な香内三郎さんが書いたはしがきに井上さんの名が出ていました。そう言えば、と気づくのは入学後でしたが。また、4年後の大学院時代の専攻がマスコミュニケーション論となって、東大新研の流れを汲む学派に属することになり、さらに2008年度に取得した勤務先のサバティカル時には東大新研の後身である東大情報学環に所属して過ごさせてもらうことになりますので、少なからぬ縁があったのだと思います。

実は高校2年生の時の担任の教員は、翌年和光の文学科へ転じて行く武田孝さんでした。武田さんには、ずいぶんと高校時代可愛がってもらいました——真面目な人でしたが——。武田さんはまた、かつて井上さんの高校時代の担任であったというのですから、これもま

たご縁があったわけです。

学内では学生たちは、メルロ・ポンティやドゥルーズ=ガタリ、ミシェル・フーコー、罗兰・バルト、ジャック・ラカンなど、ポストモダンの思想家たちと、あるいはベンヤミンやホルクハイマーなどフランクフルト学派とほとんど友だちづきあいをしているような感じで、これらの読書会をやり、ミニコミを出し、ゼミや自主ゼミで議論をしていました。年齢もまちまちで、同年代や年上の人も少なくありませんでした。他大から編入してきた人も多く、そういう雰囲気知的刺戟を与えられ、ここでイリイチやボードリヤール、アルチュセール、さらにはマルセル・モースなどを知りました。友人やゼミ仲間たちとの切磋琢磨は、ヘタなことは言えないぞ、無知は恥をかくぞ、という緊張感を生み出し、自らの勉強を強いたように思います。第2のデカンショ時代です。そういう学生文化が和光大学にはあったのです。今、勤務先の大学の学生には望むべくもありませんが、どこの大学でもそうなのだとしたら、日本の今後の知的水準は推して知るべしという感じがします。

和光で1番学べたことは、人は社会を構築してしか生きられない存在であり、社会にその存在を拘束されているということと、それゆえの社会的・文化的・歴史的に絶対的な存在ではないという相対化の視点です。強力な、ジェンダー論にとってのバックボーンを授けてもらいました。

20代半ばに抱いた「女性学」は学問たり得るか？ という疑問

井上さんの講演にもあったように、女性学研究試論という授業が開講されており、ちょうど80年前後の日本女性学会や女性学研究会の草創期を井上さんのもとで間近にみる幸運にめぐまれました。ただ、「女性学」という名称への違和感がなかったといえば嘘になります。1つは、当時、トマス・クーンなど科学社会学を学んでいて、パラダイムや科学革命について気になっていたため、「女性」という単一の性を対象に、果たして「学」としてのディシプリンがあり得るのか、方法論があるのかという根源的な思いがありました。

社会学、心理学、歴史学、法律学、経済学、教育学といった個別科学には、単独のテーマがありイシューがあり、それぞれの研究方法があります。それがいい・悪いは別として、いわば通常科学としてパラダイム化されているわけです。ところが、性の別というのは横断的なものであり、しかも範囲があまりに広い。一体パラダイムが成立するのだろうか、心配になったのです。だから、ということもあるのでしょうか、女性学やジェンダー関係の学会は、日本女性学会ができてのち、スポーツとジェンダー、ジェンダー史、ジェンダー法学、クイア学など細分化されてゆくこととなりました。もちろん、だからこそ「女性学」というディシプリンでインテグレートする必要があるのかもしれない、と今なら思います。

第2に当時気になっていたのは、「女性」という広い枠組みでインターディシプリナリーなアプローチをめざすのか否か、ということでした。それはそれで大変なことですが、魅力的な学問でもある。何せ「人間科学」の構築を目指すという壮大な構想のもとに和光大

学に来たものですから、あの頃、学際的な研究を夢見ていました。女性学はインターディシプリナリーな総合科学をマニフェストにするのかどうか、という思いでした。これも今となつては、そうであるとも言えるし、もともとあらゆる学問にとってそんなことは不可能なこと、という風にも言えるように思えます。

3つめは、「女性」という主体の問題とともに、同時に、人間関係の中にある権力関係を、「男性」のみならず他の抑圧者などとの関係抜きには考えられないのではないかと、いう思いでした。「女性」というのは他の性との関係性の中で規定されるものであって、規定しようとするヤツらとの闘い抜きに「主体」はないのではないかと。アンチがあつてこそなのか、アンチなんかなくても主体がア・プリオリにあるのか、実存主義だと所与のものとしてありそうな話なんですけど、今でも「自己」って何なのか、よくわからないところがある。

「女のアイデンティティを求めて」というスローガンは、『婦人問題懇話会会報』で書かれ、のちに『女性学とその周辺』に収められた井上さんの初期論文のタイトルですが、これまで女性是不可視の存在として扱われてきたがゆえに、まずは「女性」としての主体を確立したいという、近代の声が切実に響いてきます。実際、「労働者として」「民族自決」「日本人として」「黒人として」といった自己規定が、資本家や雇用主との圧倒的な立場の違いをあらわして団結させ、米国や日本の帝国主義を排除するための統一のスローガンとなり、米軍基地の存在に反対する根拠になり、また「黒人」であることの自己肯定感をもたらしたことなど、成果がありました。しかし、いったんアイデンティティを確立し、しかるのち次なる目標へというのは、何やら「2段階路線」風ではないかと思いました。穏健と感じたのでしょうかね、一挙に「人間解放」を謳ってもいい、フェミニズムはそれくらいのことを言ってもいいんじゃないかと、生意気にも思ったわけです。ポスト全共闘時代のラディカルな意識でしょうか。

その後の研究では、「女性として認知され、国民として認知される」ことによって日本人女性は戦争国家に加担し近代ナショナリズムに回収されていったという女性史の見方なども出てきて、もちろんそれは「国民にならなくていい」というわけではまったくありませんが、そここのところの戦略が必要なのではないかと、当時無意識に感じたのだと思います。別の言い方をすれば、「女性」と自らをくくることへの懸念、とでも言えましょうか。となると、必然的に対概念である「男性」が措定されてしまい、性別二分法を超えられないのではないかと、と当時稚拙ながらも思ったわけです。

それで悪いか、と言われるでしょうけれど、「女性の主体」という「近代」を、背負わざるを得ないものがあつたような気がします。で、実際、フェミニズムは近代思想であることは間違いありませんし。それは、『女性学をつくる』で井上さんの宣言された「女性の、女性による、女性のための学問」という定義にもつながるわけですね。

今でこそ、この3つの点が気になっていたと言えますが、逆に今でこそ、やっぱりああいう定義しかないよなあ、とも思います。当事者運動である米ウィメンズリブ、日本のウーマンリブは、まずは主体の獲得から始まったのですから。

自身、「ジェンダー研究者」などとはあまり名乗らず、専攻はなに1つマトモなものがないので、「マスコミ論、社会学、女性学」と3つも並べることが多いのですが、いつも1番最後にひっそりと「女性学」と付け、しかも「女性学」という名称にこだわりがある自分がいます。これはこれで、おそらく「男性」の研究者が「女性学」を名乗ることの自分なりの無意識的な戦略なのかもしれません。女性からも男性からも、不信の念でみられることへの。

よく人から、「男性学はやらないんですか」と、半分は真面目に、半分は「男性学」というものがあることを知らずに揶揄気味に、訊かれます。オトコの問題はオトコがやってくれと上野千鶴子さんは岩波の『日本のフェミニズム』別巻「男性学」の解題で書いていましたが、男性学にはあまり興味がなく、もしそれをするのであれば、単独でなく、女性学あるいはジェンダー論の中で、権力関係の問題としてとらえたいと思っています。かつての全米女性学会では、女性学の下位概念として男性学の分科会があったそうです。そういうの、いいですね。そもそも政治学も社会学も心理学も、男性の、男性による、男性のための学問だったのですから。

「もうひとつの大学院」としての女性雑誌研究会

在学中は、大学祭においてプロゼミ主催で井上輝子さんと、先に名前が出た池上千寿子さんの2人を講師に「女性問題」をテーマに講演会を開催したり、イリイチの自主ゼミをやったり、イリイチの来日に際して大江や坂本義和の出る横浜での国際平和会議を聞きに行ったり、10・21国際反戦デーのデモに行ったり、井上さん、針生さん、三橋さんなどもかかわったアジア・アフリカ・ラテンアメリカ文化会議に出たり、週4日大学で1限から4限までびっちり履修し、週3日間は今までと同じ量販店で働くという充実かつハードな4年間を過ごしました。取得単位は多分200単位近くなったと思いますから、我ながらよく勉強したものです。1983年の3月の卒業パーティーの日は、4年前に「入学登録」をした日と同じようによく晴れた春でした。

もともと大学院へ行って研究者になるつもりで大学に入り直したわけですので、4年次生の夏休みくらいから、またまた受験勉強をしなければなりません。大学院入試にあたっては卒論も見られるというので、卒論の手を抜くわけにいきません。論文執筆と受験勉強の両立は、けっこう大変でした。流石に12月に入ってから量販店での仕事は休ませてもらうことにして、連日明け方4時頃まで論文を書き、いったん寝て9時頃に起きてまた論文を明け方まで書く、というルーティンがいつ果てるともなく続きました。母親も、息子のそんな生活につき合ってくれました。

友人たちは東大大学院を受けたりしていましたが、とにかく入れるところで研究をすればいいやと、大学院コミュニケーション研究科のあるところへ進学、そこで博士前期課程を修了し、また受験勉強をして博士後期課程に進むことになります。

進学した83年の夏前だったでしょうか、井上さんから、ゼミでもおこなっていた女性雑

誌の内容分析研究をしたいという誘いを受け、講演にもあったように女性雑誌研究会が発足します。女性雑誌は、女性を対象に、ファッションや美容など美しさ、家事や育児など性別役割の規範を要求し、培養するイデオロギー装置として、身近な大衆メディアであり、それを批判的に分析することは、大きな意味があると考えられました。

女性雑誌研究会は、自分にとっての「もうひとつの大学院」であり、週1回の土曜日の研究会の集まりは、楽しいものでした。メンバーは、井上さんのもとに集まっていた社会人学生、卒業生、井上さんをご指名でやって来た聴講生などで、いわば「素人集団」です。研究会は、トヨタ財団から予備研究としての研究助成金を獲得し、雑誌を1ページごとに広告と記事別に分野分類する量的分析方法を開発、その手法は現在でも色いろなところに引き継がれています。今年(2010年)の5月にも、日本出版学会の代表として南京で中国・韓国・日本の「国際出版フォーラム」に参加してきていたのですが、そこでも中国語・韓国語に分析シートを翻訳して、手法について発表してきました。

研究会は1年後の84年末に報告をまとめ、トヨタ財団から成果発表の助成金をもらって1985年に研究報告書『女性雑誌の日米墨比較研究』を刊行し、刊行パーティーまでやりました。その後、同財団から2年分にわたる本研究の助成金を得ることができて、業者によってコンピューターで計算してもらった手法を開発しました。これらの成果は、自分にとってでも大学院時代の研究業績となり、大変に有難いものでした。井上さんに足を向けて寝られません。

それ以外にも、江ノ島にある神奈川女性センターでの合宿、奥多摩や清里での合宿、埼玉嵐山にある当時の名称でいえば国立婦人教育会館の女性学講座での発表や毎年の参加、京都の日本女性学研究会での上野千鶴子さんや亡くなった渡辺和子さんらの前での発表など、女性雑誌研究会は様々な活動をしました。しかも、研究会あてに社会教育の公民館や女性センターなどから講座・講師依頼が来るようになり、講座を組み立てたりメンバーを派遣するようにもなりました。

圧巻は、同財団から成果発表助成を得て、1989年に垣内出版から刊行した『女性雑誌を解読する——COMPAREPOLITAN 日・米・メキシコ比較研究』です。メンバー全員による量的分析、質的分析に関する章ごとの執筆のほか、ハワイ大学のフェミニズム言語学の大御所である、れいのるず・秋葉かつえさん、メキシコ国立大学院大学のキンテロ・栗井原淑恵さんといった国際的な研究者による言説分析の論文に加え、最後の座談会には、『新しい家庭科We』を刊行していた半田たつ子さん、その後、現在の勤務先で新しく「コミュニケーション学科」をつくり、その際にメディアリテラシーの非常勤講師としてお願いすることになる故鈴木みどりさんにも参加してもらいました。今からみれば、米国の消費資本、ジェンダー規範が、日本やメキシコに波及するカルチュラルスタディーズやポストコロニアリズムの本としても読めるものです。そもそも、我われの問題意識も、そういったところにありましたし。

例のごとく刊行パーティーを、青山のクレヨンハウスを借り切ってやりましたが、この

本は1989年度の日本出版学会賞や国際女性デーのミモザ賞を受賞したのみならず、各方面で取り上げられ、その後の女性雑誌研究に関する文献のスタンダードとなりました。経験も年齢も多様な女性たちが、自分の生活経験や性役割規範に対する違和感から出発し、社会科学的な分析方法を開発しながら、批判的な視点と論述の仕方を身につけ、その成果を広く社会に発表し還元して行ったプロセスそのものが、女性学的な実践だったと言っているでしょう。

4——米国型コミュニケーション観に対する批判の芽ばえ

話は戻りますが、83年に入学した大学院は成城大学大学院の文学研究科コミュニケーション学専攻というところで、基盤となる学部は米国のマス・コミュニケーション学、つまり実証研究を中心とする社会学や社会心理学の方法論によってパラダイム化されたマス・コミュニケーション学の総本山であった東大新聞研究所の流れをくむところでした。東大新研は、もちろんそれだけでなく、歴史的アプローチや経済学的アプローチ、また法律学的アプローチなど、多様な接近方法を採用していました。しかし、日本で主流化した米国の行動科学的研究法にもとづく実証研究の多くは、コミュニケーションやメディアによる「説得」や「影響」に成功することが「効果」であるととらえている節が濃厚にありました。

米国は近代における最後から2番目——最後は日本だったと言っていると思います——の帝国主義国家として、多くの異民族、異国人、他国を抑圧・占領し、他国・他文化の価値観を自分たちの価値観で染め上げることをよきこと、ミッションとしてきました。その背景にはキリスト教的世界観やヨーロッパの帝国主義のノウハウがありますが、ヨーロッパの場合まだ自己を相対化する知的土壌があったのに対し、米国は建国の理念からして完成された形態として人工的につくられた新興国家、また食いつめ者や移民やネイティブによる寄せ集めの国民国家でした。そのため、武力、経済、文化の3つを使って急いで自国を束ねる必要性に迫られ、それが一国主義的な独善性を生んで、米国イコール世界だと思いを込めてしまいました。

武力は、恐怖をコントロールして言うことをきかせるコミュニケーション手段であり、経済は、稀少性からくる欲望をコントロールして言うことをきかせるコミュニケーション手段であり、文化は、言語や思考や暮らしをコントロールする手段です。米国はこの3手法を使って国内を統一し他国をも支配してきたわけです。個人の武装が合州国憲法で保障され、国家はミサイルという暴力装置を使って世界に脅しをかけています。ドルは世界1強い貨幣です。ハリウッド映画は世界を席卷し、マクドナルドとコココーラが世界1美味しい食べ物と飲み物であると思っています。米国がコミュニケーション政策を洗練させ、この国においてコミュニケーション研究が進んだのはけだし当然のことでした。相手は遅れている、野蛮だ、可哀想だ、だから文明側である自分たちと同じレベルに高めてあげね

ばならない、という善意に立つ余計なお節介が、東南アジア、南米、日本にも、またイラクにもなされ、「説得」し「影響」を与えることが「コミュニケーションの効果」ということになりました。2001年の9・11に際し「文明か野蛮か」「どっちにつくのか」と吼えたジョージ・ブッシュの発言や政治手法、あの時の米国や米国人の反応など、その典型ですね。

学部では体系的に学ばなかった、そういったマスコミ理論やコミュニケーション理論を勉強するにつれ、むしろ米国的コミュニケーション観を批判する方にウェイトがかかっていったような気がします。先の女性雑誌の米・日・メキシコの比較研究のところでも言いましたが、ジェンダーを軸に、晩期資本主義・消費社会化による文化破壊と文化の画一化、その一方で文化のハイブリッド性や大衆文化の中にある抵抗の快楽、それらが植民地だった地域・国でどのようにせめぎ合っているか、自分自身、新たな批判の学に接近して行くきっかけになりました。

1984年の年明けに提出した修士論文は、女性雑誌研究会のデータも使わせてもらって、雑誌文化がもたらしているポピュリズムを批判し、同じ大学院の博士後期課程に進みました。語学を中心に、30歳近くになって最後の受験勉強——と言っても単語を復習する程度でしたが——をしました。今でも、大学入試や大学院入試などの夢をみます。これが通らないとマズい。しかし一方では自分は既に大学教員になっていることは夢の中でも自覚している。おかしいな、オレは大学教授なのに、どうしてこの問題を解かされているんだろう。悪夢ですね。

博士前期課程在学中の後半から、それまで8年近く勤めていた地元の量販店の仕事は辞め、院の指導教員の紹介で、マスコミの業界団体である日本新聞協会の研究所の委嘱研究員となり、研究会の記録づくりや調査研究などに従事するようになっていました。新聞協会研究所にも、トータルで8年勤めました。また、博士後期課程に進んでからは、東大新研に転じて行った教員の紹介で、マーケティング・サービスという社会調査の会社の嘱託研究員となり、各種の調査に従事、6年勤めました。マスコミの現場、新聞の現場、様々なメディア法制や経営といったインフラの大切さを学ぶとともに、本格的な調査手法についてOJTで学ぶことができ、これもまた「もうひとつの大学院」でした。給料をもらって研究ができ、それが場合によっては業績にもなったのですから、有難い話です。現在教えている新聞論や社会調査実習などは、みなこの頃の実務・研究体験が教員資格となっています。

オーバードクター時代の苦労と幸運

博士前期課程は通常2年間、博士後期課程は通常3年間の修学とされています。しかし、ドクターコースは3年いても就職、つまり大学の教員職に就くのはほぼ皆無というのが昔も今も実情です。ご多分にもれず、後期課程4年生になり、5年生になり、6年生になりました。いわゆるオーバードクター、いまで言うポストドクです。強力なコネもなく、指導教授に力もなく、業績は同級生より多かったものの大した内容ではありませんので、大学に

引っぱられることや教員公募に受かることはありませんでした。年齢はとうに30歳を過ぎています。新聞協会研究所やマーケティング・サービスは、似たような境遇の院生たちが調査研究の下支えをしていましたが、流石にあまり歳がいくと雇う側も困ってくる。

見かねて研究所の上司が専門学校講師の口を紹介してくれましたが、ペイは悪くなかったものの、大学の非常勤講師以上でなければ「教歴」にはなりません。社会教育講座や女性センターでの講師、学会の課題発表でゲストで呼ばれるケースも増え、依頼原稿も来るようになっていましたが、一緒に発表している同じ歳の方は既に「助教授」の肩書きなのにこちらは「院生」というのは、ちょっとカッコ悪い。確かに、人より4年遅いスタートだったし、東大大学院でもありませんが、このままどうなるのだろうと、母子ともに不安ではありました。

人によっては、女性学をやっているから採用されない、つまり敬遠されるのではないかと、親切心から“忠告”されたこともあります。今や「ジェンダー」専攻は、教員採用にあたって有利にもなり得ますし、発表媒体も増えて業績も多少積みやすくなっているのは、隔世の感があります。

幸いにして、年明けには後期課程6年目が修了しいよいよ学籍もなくなろうという時、これもまた研究所の上司が、関西の大学に専任教員として転じてゆくに際して、自分の持っていた大学の非常勤講師コマを1つくれました。また同じ時期、マーケティング・サービスの嘱託と一緒に仕事をしている助教授が、自分のいた短期大学の非常勤講師1コマを紹介してくれました。助けてくれるのは、やはり人です。そしてそうやって構築した人間関係です。

どうやらまったくの「浪人」にならずに、研究所、マーケティング調査会社、大学の講師2カ所で糊をしのぐ1年間を過ごすことができました。これであと2、3年はガマンしなければならぬかな、それにしても奨学金の返還が困ったなど思っていたところへ、有難いことに、他大へ転じていた大学院時代の先生が、ある短大で新設のコミュニケーション関連学科があり、そこで学科長が新任を捜しているのを君を推薦しておいた、という電話をもらいました。その短期大学の学科長とは日本マス・コミュニケーション学会大会の会員控室でたまたま女性雑誌の研究について話したことがあって、小さな面識はありました。大学院時代の先生が「モロハシというのがいるが」と言ったら「ああ、モロハシ君なら知っている」ということで、トントン拍子に決まったわけです。

それにしても、学会で1回話しただけの先生であり、大学院時代の先生も指導教員ではなく、授業は毎年のように履修し修士論文の副査もしてもらったものの、今は別の大学に転じた先生です。これも自分が結んできた人とのつながりで、自分の人生を切り拓くことができ、ツキがめぐってきたと思えました。35歳にして初めて正規の職を得たのですが、大学院の同期や同じ歳の友人たちの中で、これでも1番の就職者でした。1992年のことです。

5 —— バブル経済時代と女性行政の進展時期

博士後期課程時代の80年代半ばから90年頃まで、社会はバブル経済のまっただ中でした。学部生たちは就職の内定社の数を競い、我われ院生は研究所や知人関係のつてで年末年始の宴会に追われる日々でした。専門学校の入学式、クリスマスパーティー、卒業式などもみな、舞浜のディズニーランド近くのシェラトンでおこなわれ、飲み食いし放題でした。テレビでは織田裕二のトレンドドラマが視聴率を上げ、フジテレビが民放のトップになっていました。誰もが高額なNTT株をこぞって買い、生命保険会社がゴッホの絵を57億円で購入しました。クリスマス・イブの日のスキー場と東京ベイヒルトンは何カ月も前から予約で満員だったそうです。91年には芝浦でワンレンのミニスカ女性たちが、「お立ち台」で扇子を振っていました。

狂った日本は、その後のバブル崩壊とともに、1995年の阪神・淡路大震災とオウム真理教による地下鉄サリン事件で、とどめを刺されます。

一方、東欧やソビエト連邦の体制が崩壊し、東西ドイツが統一され、中東では米国によるテレビゲーム戦争が仕掛けられ、中国では「自由」を国家が弾圧する天安門事件が起きるなど、世界はなだれを打って変わってゆき、結果として先に言ったような米国の一国主義化を招くことになりました。20世紀末には世界も狂ってきた感じがします。

もっとも、ジェンダー領域では、さまざまな進展が見られた時代でもありました。NGOや地域の女性たちが動かす形で、各地方自治体に女性政策推進のための担当部署ができ、行動計画がつくられ、女性センターが設立されてそこにさまざまな学習団体やネットワークが集い、女性たちが力をつけてゆきました。95年には北京で第4回目にあたる世界女性会議が開かれ、政府間会議のほかにNGO会議と各種ワークショップが持たれ、日本から多くの人たちが参加しました。その中から、日本軍戦時性奴隷やドメスティックバイオレンス、売買春など、「暴力」というテーマが浮上してきました。

この北京会議への参加体験は、貴重なものでした。NGO会議は政府間会議と異なる場所の北京郊外で持たれ、会場には学校やその周辺の建造物が充てられていました。世界中から集まった多様な女性たちをウォッチングするだけでも楽しく、同時間に何百と開催されているワークショップにおける、各国女性たちのアグレッシブさにも色いろと驚かされました。会場では、よく一緒に講演をした福島瑞穂さんや、田中和子さんとの共編著『ジェンダーからみた新聞のうら・おもて』で1章を書いてもらった、のちにアジア女性国際戦犯法廷の主宰者の1人となる松井やよりさん——その後亡くなってしまいますが——、毎日新聞大阪のフェミニズム記者である畑律江さん、日本語における女性表現の批判で知られる遠藤織枝さんなど、普段だとなかなか会えない人たちといちどきに会うことができたのもいい思い出です。もちろん、井上さんも参加していました。

北京会議で刺激を得たのは我われだけでなかったらしく、その後日本政府は、NGOな

どからのパブリックコメントを受けて、男女共同参画2000年プランや行動計画を策定していきます。どうやら国も、女男平等を推進しないと少子高齢社会を生き延びられないということに気づき、少し本気になり始めたのがこの世紀末でした。リブから始まった女性の当事者運動は、行政をも動かすようになったのです。個人的にも、自治体の女男平等推進のためのプランづくりや条例づくりの委員会・審議会の委員として依頼を受けるようになるのが、北京会議前後くらいからです。

しかしながら、21世紀に入ると、これらのうねりに対する大きな反動の波、バックラッシュがジェンダー界を襲います。

情報メディア環境の変容と個人のタコツボ化

その後、社会の変化と、技術的インフラの進展、それにともなって人びとの意識とが相俟って、情報メディア環境が急速に変わりました。ケータイやインターネットが情報行動や人間関係・社会関係を変えたのみならず、我われの存在様式、たとえば社会的に構築されるジェンダーに関する意識や態度をも変えてしまったのです。それは、ひとことで言うて「ジェンダーへの開き直し」のようなものではないかと思っています。

「大きな物語」を失った時代、人びとのタコツボ化とともに多様で個別の情報がいとまたやすく得られ、個別のコミュニケーションができる環境が短期間に整ってしまいました。たとえば待ち合わせにはあらかじめ当事者間で時間と場所を決めて、その約束を履行することが求められました。万が一待ち合わせに間に合わないような場合には、駅では伝言板が活躍したわけです。ところがケータイ電話の普及とともに、人びとは約束をしなくなりました。いったん時間と場所を決めて集まる必要がなくなり、直接現地集合することが可能となり、同時に遅刻やドタキャンが簡単にできるようになったのです。また、かつては電話は一家に1台のもので居間や玄関にあり、家族全員が共有するもので、しかもその使用权はヒエラルキーがあって親が優先であり、「長電話」は御法度でした。また、夜中には電話をかけてもかけられてもいけないものでした。一家を目覚めさせますし、夜中の電話は身内の誰かが死んだという不吉なものと決まっていたからです。あるいは辞書を引いたり調べものをする時には、不必要な情報からいかに必要な情報にアプローチするかのノウハウがあり、同時に不必要な情報も否応なく眼に入るところに意味がありました。ところが、電子辞書はそのことばの意味が一発で出てきますし、ネット環境は調べものの手間を一挙に軽減しました。

問題は、我われがそういった社会を望んできたことです。「大きな政府」ではなく「小さな政府」を望み、約束に縛られない自由な行動を望み、親が監視しない自分自身のテレビや電話を望み、情報をたちどころに得ることのできるテクノロジーを望んできたのは他ならぬ我われでした。

そのようにして、一見個人の多様性と自由が保障される世の中ができたような気がしてくると、個人は社会的連帯というものに急激に興味を失ってゆきます。新聞を読まなくな

り、本を読まなくなり、社会のできごとや他者への興味をなくし、ひたすら自分の欲望に動物的に忠実になり、世紀末から新世紀にかけて「動物化するポストモダン」社会がアツという間に成立しました。「ものを知らない」ことが恥ではなくなり、自分の興味がある特化した情報のみを消費するオタクが市民権を得ます。大江が言っていた「全体的知識人」などというのは、加藤周一のような人亡きあと、もはや見あたりません。

個人の全能感は——これも我われが望んできたことですが——よく言えば「人は人、自分は自分」という無関心さと呼び起こし、社会的タブーを失わせ、それは結果として「私は女らしくありたいから女らしいファッションをする」「自分は女と男は本質的に違うと思うので性別役割は当然だと思う」といったような主張を“迷い”や“配慮”なく言える環境をつくりました。これが、「ジェンダーへの開き直り」と言った意味です。

これは、在日するアジア人に対する露骨な差別発言や暴力的行動など、他のことにもいえます。バックラッシュは、9・11の米国と日本を象徴的メルクマールとする、弱肉強食による格差社会の「負け組」を「自己責任」とするネオリベラリズムを機動力としながら、「大きな物語」を失った世界が米国の単独主義を許しつつ他はどんどんタコツボ化・孤立化していった間隙をぬって出てきた思潮だったのではないかと思います。そこにはまた、閉塞した社会の中で、「敵」を措定することによってルサンチマンを吸収する動機や機能がありました。性という二分法を脱構築しようとするフェミニズムやジェンダー界、女性が労働の場に出て男性に家事・育児・介護も担ってもらおうという女男共同参画行政は、家族やその延長である国家を破壊するという理由で恰好のターゲットとなったのです。

——終わりに

同時代体験、読書体験、音楽や映画体験、大学や大学院での勉強、自分で構築してきたネットワークなどが、自分の政治的社会化と大きくかかわり、存在や意識を規定しているということを強く自覚します。タコツボ化した電子メディア社会において、現代の人びとの社会化というものがあることは確かでしょう。しかし、そういった集合体の結果が、近未来においてどういう社会や文化、政治をもたらすか、一抹の不安がないではありません。

1999年に現在の大学に移り、学部や大学院の授業でジョン・フィスクなどのカルチュラルスタディーズや、エドワード・サイード、ベネディクト・アンダーソンなどのポストコロニアリズムを論じるようになりました。また、文学部や国際交流学部などでの多くの科目が、ディアスポラの語りや、文化のハイブリディティに注目したり、主流文化に対する抵抗的な読みの可能性について考察するなど、ジェンダーやエスニシティ、ポピュラーカルチャーの政治性をめぐって新たな多様性に注目する科目が並び、面白い状況にあると思います。かつてより本を読まなくなり、音楽を聴かなくなり、映画を観なくなりましたが、それでもサイードやスピヴァクなどの本から学ぶことはまだまだあり、勉強はとどまるどころを知りません。自分の米国批判もさらに拍車がかかってきたように思いま

す。ジェンダーとメディア研究にこだわりながら、射程を広げていくつもりです。

「もはや戦後ではない」と言われた1950年代半ばに生まれた者も、もはや中年というより初老の領域となり、親はそろそろ寿命で、こちらの持ち時間もそれほどありません。井上さんが定年を迎えるわけです。現在は、市民運動などに「先祖返り」しながら、遅々としてではありますが憲法9条の実現を求めたり、日本の戦争責任の問題を考えたりしています。司会をしてくださっている道場さんとも同じ市民運動グループに属しています。その延長線上で、アウシュビッツとビルケナウの収容所に行ったり、サイパンの戦跡やテニアンの原爆搭載の地に行ったり、しばしば沖縄の米軍基地に行ったり、ヒロシマに行ったり、また韓国や台湾に行ったりしています。日本軍によって戦時性奴隷にされていたハルモニたちが暮らすナムの家にも何回か行きました。トルコで東西文明が会うさまを間近で見たのものまた貴重な経験でした。

また、自治体の女男共同参画行政の各種審議会・委員会の委員をやったりしながら、阿部さんが実践しておられるDV防止対策などの端っこにかかわったりもしています。一方、女性学の最新動向や理論などについては、優秀でより若手である千田さんから学ばせてもらうことで手を抜かせてもらっています。運動から始まった女性学は、自分自身の中でもまた運動と結びつきながら、学問と実践との橋渡しをしているようにも思います。

今日は、個人的な思想遍歴を通じて、女性学・ジェンダー論と自分とのかかわりをお話しさせていただきました。

【もろはし たいき・フェリス女学院大学文学部コミュニケーション学科教授】